【カテゴリーⅡ】

日本建築学会計画系論文集 第77巻 第671号, 9-18, 2012年1月
J. Archit. Plann., AIJ, Vol. 77 No. 671, 9-18, Jan., 2012

多摩ニュータウン高齢者支援スペース・福祉亭の活動と利用の実態について

－多摩ニュータウンの高齢者支援スペースと利用者の地域生活様態に関する研究（その１）－

FUKUSHITEI, A SUPPORTING PLACE FOR SENIOR CITIZENS IN TAMA NEW TOWN, ITS ACTIVITIES AND UTILIZATION

－ A study on a supporting place for senior citizens in Tama New Town and the users' living styles (Part 1) －

余 錦 芳*, 松本真澄**, 上野 淳***

Chingfang YU, Masumi MATSUMOTO and Jun UENO

The Fukushitei, founded by NPO Legal Person in 2001, is a volunteer serviced café and the place of senior citizens. Catching national attention, it is regarded as the initiator of a supporting place for senior citizens in Tama New Town.

The research is based on three investigations : a participant observation survey, a one-year-long actual use survey, and a one-week actual use survey. Through these investigations, details of the actual utilization of Fukushitei as well as the significance of its existence are recognized.

1. In addition to providing support to daily lives, Fukushitei is taken as a good-place-to-go by those who engage in entertaining communication activities there.
2. Fukushitei serves as a guardian for senior citizens in the region.
3. Fukushitei prevents senior citizens from isolation.
4. Fukushitei provides users of different personalities and life styles with a place to enjoy themselves.

Keywords: *New Town, Senior Citizen, Place, Community-Café, Supporting Place for Senior Citizens*
ニュータウン，高齢者，居場所，コミュニティ・カフェ，高齢者支援スペース

１．研究の背景と目的

東京西部の多摩市，八王子市，稲城市にまたがる多摩ニュータウン（以下：多摩ＮＴ）は，計画人口34万人の我が国最大のニュータウンである．1971年に最初の入居が実現して以来40年の歴史を刻んでおり，新規開発（新住宅市街地開発事業）は終了し，ストックマネージメントの段階に入っている．

この中でも初期入居地である諏訪・永山地区は住宅の老朽化や居住者の高齢化などが顕在化しはじめている．初期入居当時30歳代で入居した階層が継続居住をしているとすると，今やリタイヤ世代・高齢期に入っているわけで，今後の更なる急速な高齢化も懸念される．日本の高齢化率は現在23%であるが（2010），諏訪・永山地区の平均は25%とそれを上回っている．中でも，諏訪４，５丁目，永山４，５丁目などの一部街区では高齢化率が30%を超えており，超高齢社会という意味でもモデル的な考察の対象地域と考える．しかし，国全体で要介護認定を受けている高齢者が約16.7%[注1)]であることなどから，特に前期高齢者を中心に約８割は自立的な地域継続居住が可能な「元気高齢者」と考えられる．こうした人々が，持続的に地域居住を継続して行くための支援環境を地域社会に多層的に整えて行くことが大切になってくると考える．

こうした状況にあって，在宅自立の高齢者の日常の趣味・交流活動や介護予防を支援することを目的とした様々なサポート拠点が，行政，ＮＰＯ法人，任意団体，個人などによって設立，運営されるようになってきており，文献1）～14）に示す様に全国的な展開をみせる状況にある．

多摩ＮＴ諏訪・永山地区でもこうした自立的な高齢者サポート拠点が次々に開設されてきており，筆者等は文献1）で，この数年でその数は10施設に及んでいることとその利用のされ方の実態を詳しく報じた．この意味では多摩ＮＴ諏訪・永山地区は歴史を刻みつつある大規模住宅団地における住民等による自立的な高齢者支援システムの先駆的存在のひとつとして位置づけることができるとも考えられる．この中で，2002年に開設されたＮＰＯ法人の運営による「福祉亭」は，ボランティアによって支えられて活発な活動が展開されている「自立高齢者の居場所」として全国的にも注目されており[注2)]，多摩ＮＴにおける高齢者支援スペースの嚆矢としての存在といえる．

本研究はこの福祉亭を研究対象として，１）地域社会におけるこの高齢者支援スペースが実際にどの様に使いこなされ，どの様に機能しているか，２）ここを日常的に利用する高齢者の地域社会生活

* 首都大学東京大学院都市環境科学研究科 都市システム科学域 博士後期課程・修士(都市科学)
Doctoral Course, Graduate School of Urban Environmental Sciences, Tokyo Metropolitan Univ., M. Urban Science
** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 助教
Assistant Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ.
*** 首都大学東京大学院都市環境科学研究科建築学域 教授・工博
Prof., Graduate School of Architecture, Tokyo Metropolitan Univ., Dr. Eng.

にとって福祉亭の存在がどの様な意味を持っているか，を解明しようとする．以上を，２報に分けて報ずることとし，

１）本報では，施設側からの調査として，表３に示した３年間にわたる参与観察調査，年間を通じた利用状況に関する調査，一週間連続の詳細観察調査の三つを行い，福祉亭の活動内容，活動場面，個々人による利用の様態などに焦点をあてて分析考察する

２）次報では，利用者側からの調査として，福祉亭の常連的な利用者に対して生活歴を含めた詳細なヒアリング調査を行い，その日常生活様態の類型を見出し，それぞれの利用者にとってこの様な高齢者支援スペースがどの様な意義を持っているかを分析・考察するを予定している．

尚，本研究を展開するにあたり，筆頭筆者・余は2007年11月から現在に到るまで，福祉亭の活動にボランティアとして参加し，その運営や高齢者サポートに主体的にかかわって来た．運営側及び利用者側の双方との間に信頼関係を持つことができ，この活動を通じて，福祉亭に関る人々を誠実に見守り続けることができたと考えている．

２．既往論文と本研究の位置付け

高齢者にとって地域社会の中での居場所を形成している地域施設の持つ意義は大きいことを田中ら[2]が，高齢者が地域で自立した生活を続けるためには，地域に介護予防・生活支援サービスなどの拠点を数多くかつ適切に展開することが大切であることを鄭ら[3]が論じている．また，山本[4]はＡＤＬを低下させないために，外出機会を増やし社会的接触を多くして心身の健康の維持増進をはかる必要があると述べている．さらに，桧垣ら[5]は高齢者が自宅以外に気軽に訪れることのできる場所の持つ重要性を指摘している．

高齢者の地域の交流の場・居場所などの重要性が認識される中で，行政，ＮＰＯ法人，任意団体や個人が設立，運営する拠点は多くなってきており、研究が蓄積されてきている。大阪府の「ふれあいリビング」，「ひがしまち街角広場」などの利用実態や運営方法に関する研究[6]～[11]，地域住民が主体的に運営する交流の場の実態について広く分析した研究[12],[13]，社会福祉協議会を中心に展開されている「ふれあい・いきいきサロン」と地域コミュニティの関係[14]に焦点を当てた研究などがある．

これ等に対し，本研究は，高齢化が進行する大規模住宅都市・多摩ＮＴに焦点をあて，住民が自立的に運営を行っている支援拠点「福祉亭」を研究対象としてとりあげる．本研究では，施設側からの調査と利用者側からの調査を組合せて，高齢者支援スペース「福祉亭」の活動内容と利用の様態，及びその地域社会における存在の意義を考察することを特色としていると考える．

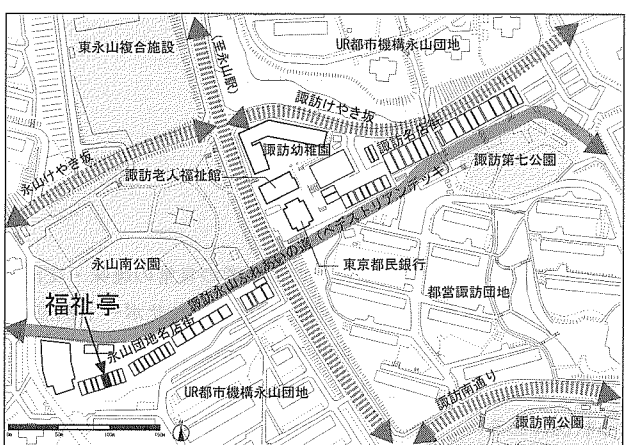

図１　福祉亭の位置（多摩ニュータウン諏訪・永山地区）

３．福祉亭の概要

３．１．福祉亭の位置と施設概要

福祉亭は多摩ＮＴ永山地区近隣センター商店街の空き店舗を改造して運営している（図１）．通行量の多いペデストリアンに面し，近くには保育園，スーパーマーケット，福祉会館などが建ち並ぶ．地域住民が自然に集まる場所に立地しており，入り口のそばで小学生がはしゃいでいる姿や，子供連れの母親たちが立ち話をしたりしている姿が常時見られる．室内の広さは60㎡程度であり，室外の５席を含めて37席が設けられている（図２）．冷蔵庫は生協から譲り受け，テーブルなどの家具は手作りである．また，食器やポット，

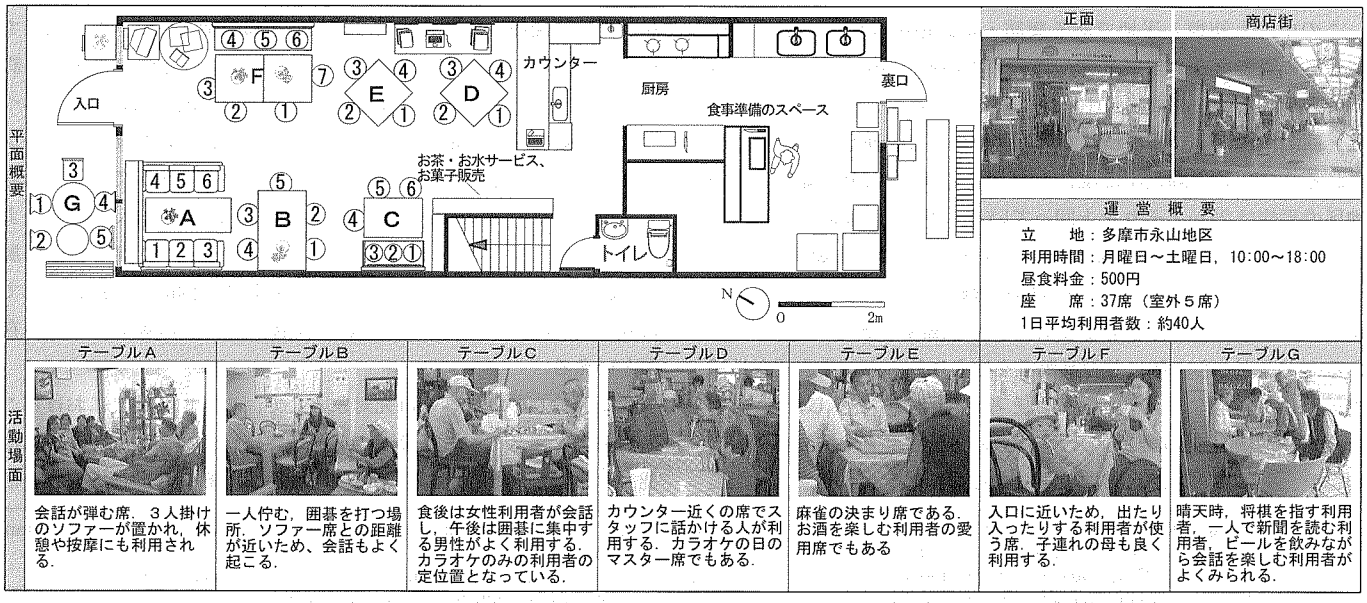

図２　福祉亭の平面図及び室内の様子

ソファー，椅子など多くが住民からの寄付によっている．店内は家庭的な暖かい雰囲気に設えられている．

3．2．福祉亭の設立経緯

福祉亭の設立から現在に至る活動経緯を表１にまとめた．福祉亭は，2001年多摩市で開催された市民懇談会「多摩市高齢者社会参加拡大事業運営協議会」がきっかけとなり最初の形が立ち上げられた．同年８月に「高齢者いきいき事業」として東京都と多摩市から３年間の補助金が交付され，2002年１月に世代間交流の場として「ライブハウス永山福祉亭」が商店街空き店舗で活動を開始した．当時の運営は多摩市からの補助金（1250万円）で賄われていたが，2003年の補助金交付終了を目前に運営方針を見直すこととなった．市民に参加を呼びかけ無償ボランティアによる運営へ移行し，2003年４月に現在の姿の福祉亭が誕生した．趣味活動と食事・喫茶の場の提供を中心に運営し，年間売上が約900万円，完全な無償ボランティアによる運営によるとこから人件費が不要ということもあり経常黒字の自主経営となった．

3．3．運営スタッフ

福祉亭は，中核メンバー（理事長１名と理事３名）と一般ボランティアによって運営が支えられている．ボランティアは約100名登録されており，毎日４～10名が活動している．福祉亭の経費は50%が食材費，残りが水光熱費とその他諸経費であり，これ等必要経費を全て差し引いた残額が一日４時間以上働くボランティアに「こころの栄養」（理事のＴさん）として交通費相当が支給されている．但し，中核メンバーの４名は完全無償である．

尚，月曜日の隔週は「若人塾」[注3)]が，水曜日は「生活サポート隊」[注4)]がここを場とした運営を行っている．

3．4．提供サービス

福祉亭は月曜日から土曜日は10時から18時まで，日曜日は月２回13時30分から16時まで営業している．利用者の制限は特になく，誰でも自由に利用できる．主なサービス内容は，食事と喫茶，趣味活動（囲碁・将棋など）の場の提供である．食事は定食（500円：１日約30食），ラーメン，サンドイッチの他，ビールなどのアルコール類も提供している．当初の構想は「居場所としてのスペースと食事の提供」であったが，利用者の意見を取り入れ，アルコール類の提供や囲碁・将棋などの趣味活動の場の提供も行う現在の運営の形となった．

日常的に提供しているサービスのほかに，介護予防を目的としたミニデイサービス[注5)]が毎週水曜日に行われている．その他，様々なプログラム（表２）や年間を通じて行われる様々な行事・イベントが展開されている．これらのスケジュールは毎月の福祉亭発行の情報紙「いきいき新聞」に，地域情報，利用者からの投稿などとともに掲載される．提供プログラムは曜日や週によって運営者と内容が異なるため，新聞の行事予定を見て来店する利用者も少なくない．いずれも利用者の趣向によって自由に参加することができる．

4．調査概要

本研究では，以下の３つの調査を行った（表３）．

1）参与観察調査　：　筆頭著者・余は2007年から現時点まで３年間にわたり福祉亭の活動にボランティアとして週に２，３日程度参加し，イベント時は利用者として参加してきた．福祉亭に来店する常連利用者を中心として馴染みの関係を構築しつつ，年間を通じた運営状況とボランティア及び利用者の活動の全体像を把握することを試みた．

2）年間利用実態調査　：　2009年11月～2010年10月にかけて１年間を通じて利用概要の調査を全ての営業日において実施した．調査者・余に加えボランティアスタッフの協力により，食事や喫茶の注文の際発行する伝票に来店者の属性（特定できる場合は名前やニックネーム，性別，年齢，住所など）をメモしてその記録を蓄積した．伝票から利用内容が食事（定食やラーメンなど）か喫茶・飲酒（コーヒー・紅茶やデザート，酒類など）のみか，が判別可能である．尚，飲食を伴わない極短時間の立ち寄りや見学者なども居るが，全体からみれば少数であり，利用概要の把握には差し支えない範囲と判断し，記録対象外とした．また，同日に同じ名前の伝票が複数あった場合は１回の来店と数え，食事と喫茶の双方にオーダーがあった場合は食事利用として集計した．サークル仲間など複数人でグループ来店した場合の伝票は，オーダーの数を利用者の数として扱い，ボランティアの勤務時間内の飲食の伝票は記録に含めていない．

表１　福祉亭の設立と活動の経緯

年月	設立経緯及び各種活動内容
2002. 1	「高齢者いきいき事業」として【ライブハウス永山福祉亭】を立ち上げる （場の提供のみ） 運営：「ＮＰＯ法人福祉ネット多摩」（東京都と多摩市から３年間の補助）
2002. 2	【カフェノード】開業：喫茶・軽食の提供を開始
2003. 1	【生活サポート隊】結成
2003. 4	【永山福祉亭】に名称変更開設．市民ボランティアによる運営を開始
2003. 4	精神障がい者の地域社会参加トレーニングを目的として【特定非営利活動法人わこうど精神障がい者共同作業所（若人塾）】が運営参加（月２回，月曜日隔週） 飲み物の収益のみ福祉亭へ
2004. 2	東京都に法人登録 【ＮＰＯ特定非営利活動法人福祉亭（福祉亭）】となる
2004. 4	自主運営を開始
2004. 7	地域に居住する外国人との交流【ミニミニ国際】を開始
2005. 4	東京都のミニデイ事業を受け，【ミニデイサービス】を開始 （市から年間60万円の補助金．活動主体：生活サポート隊）
2005	多摩市市民提案型まちづくり事業：【託幼老と学び・体験スペースづくり】事業 【託幼老所まめふく＆まなふく】を実施
2005. 9	市民提案型まちづくり事業：「地域支え合い支援事業」：【リボン活動】[注6)]を開始 NPO福祉亭・多摩市地域支えあい実施プロジェクト【おそばに置いてお一人暮らしの方のための便利帳（諏訪，永山地区限定版）】の作成及び無料配布
2006	市民提案型まちづくり事業：【地域支え合い支援事業】を開始 （のちに【ミニミニ国際】に併合）
2007. 7	とじこもりがちな高齢者への【絵手紙活動】を開始
2008. 8	地域のバリア状況を把握するための【ひやりハット地図】を作成

表２　曜日別提供プログラム

週	曜日	月	火	水	木	金	土	日
1	午後		麻雀出張指圧		よろず相談		注7) 健康フラ	
2	午前			唱歌				
	午後		麻雀出張指圧	算数サロン		よろず相談	健康フラ	
3	午後		麻雀出張指圧		茶の湯 よろず相談		健康フラ お酒の会	
4	午前	ミニミニ国際		唱歌			健康フラ	
	午後		麻雀出張指圧	体操		よろず相談		寝床寄席
5	午後		麻雀出張指圧	文字を書こう			健康フラ	カラオケ

注：月によって週の予定が異なる場合がある．
囲碁・将棋は月曜から土曜の午後に行っている．

表３　調査概要

参与観察調査	目的	運営実態及び利用者とその利用実態を把握する
	対象	来店者全員
	方法	ボランティア，利用者としてイベントなどの参加
	期間	2007年11月～
	内容	①運営内容　②利用者の基本属性
年間利用実態調査	目的	利用者の年間を通じた利用実態を把握する
	対象	利用者
	方法	伝票の記録
	期間	2009年11月～2010年10月
	内容	①利用内容 ②利用頻度 ③利用者の基本属性
週間利用実態調査	目的	利用実態を把握する
	対象	来店者全員
	方法	終日観察調査
	期間	2010年10月19日～25日（24日，日曜日を除く）
	内容	①利用頻度②滞在時間③滞在場所④利用内容⑤行為内容

ここで，馴染み客，頻度高く繰り返し来店する常連利用者，来店は時々ではあるが調査者や記録担当のボランティアスタッフに名前や住所などが記憶されている利用者，などは伝票にそれら属性を簡単にメモ書きする調査としたので，これらの人々は個人が特定できている．これを本研究では「個人特定利用者」と定義する．集計・分析にあたってこの個人特定利用者には利用者コード番号を付した．担当のスタッフが利用者を特定できない場合や，名前などの属性を記入していない場合は，伝票は個人特定不能として処理した．

この調査によって，年間の総利用人数，一日の平均利用人数をとらえ，その季節変動，曜日変動を明らかにすると共に，頻度高く来店する利用者から，時々，しかし年間を通じて安定的な来店をする利用者など，利用者には来店頻度に一定のパターンや類型があることを見出そうとした．

3）週間利用実態調査　：　2010年10月19日（火）～25（月）の一週間（非営業の日曜日を除く6日間），調査者・余が開店時刻から閉店時刻まで滞在し，来店者の利用内容，滞在場所，滞在時間（来店・帰店時刻）を観察記録した．

この調査によって，福祉亭の利用者が実際にここをどの様に使いこなしているのかを把握すると共に，長時間滞在する利用者から滞在が比較的短時間である利用者まで，一定の類型があることを見出そうとした．

5．年間調査による福祉亭の活動と来店者の利用様態に関する考察

5．1．年間の活動と利用状況の概要

調査期間の福祉亭の営業日数は表4の通り，年間301日であった．年間の延べ利用者数に占める個人特定利用者の構成を図3に示した．この個人特定利用者の実人数は372人，年間延べ利用は6,930人となり，全延べ利用12,084人の57%を個人を特定しながら把握できていることになる．伝票とそれにメモ記載された利用者の属性のデータの集計による利用内容，利用者属性などの概要を表5にまとめる．年間で，延べ12,084名，一日平均約40名の利用があったことが示され，個人特定利用者についてみると，食事と喫茶の利用が6：4，男女がほぼ同数，65歳以上の高齢者が67%，永山地区在住の利用者が60%，などとなっている．

5．2．利用者数の変動とその要因

1）月変動

調査期間中の月毎の一日平均利用者数を図4にまとめた．真夏と真冬に利用者数が落ち込み，気候がよい春，秋に増加する傾向はあるが，全体的には年間を通じて安定した利用があるといえる．利用者が最も多いのは3月と4月で平均利用者数は44名，最も少なかったのは8月で33名である．当年夏の記録的な猛暑のため外出を控えた傾向があること，猛暑の影響による体調不良のため入院した利用者も少なくなかったこと，などが影響している．

2）週変動と天候の影響

年間を通じた曜日別の一日平均利用者数を晴・曇・雨の天候別に図5に示す．曜日毎の催し物・行事の影響を若干受け，月・水の利用者数は相対的に少ない．ミニデイサービスを行っているため常連的利用者は来店をやや控える傾向があることなどが要因と考えられる．天候別にみてみると，雨天日には相対的に利用者は少なくなり特に女性利用者がやや減少する傾向があるが，全体としては大きな影響は受けていないといえる．

5．3．個人特定利用者の来店パターン

ここでは個人特定利用者のうち年間利用が12回以上に及ぶ群の来店パターンについての分析・考察を行う．前述した個人特定利用者372名の年間の来店日数分布を集計すると表6に示すようになる．ここで年12回以上（平均的なインターバルで来店したと仮定

表4　年間調査の営業日数（調査対象日数）

対象日数	月	火	水	木	金	土	日	計
2009年11月	3	3	3	4	4	4	2	23
12月	3	4	4	4	4	4	0	23
2010年1月	1	4	4	4	4	3	2	22
2月	4	4	4	3	4	4	2	25
3月	4	5	5	4	4	4	2	28
4月	4	4	4	4	5	4	2	27
5月	4	3	3	4	4	5	1	24
6月	4	4	5	4	4	4	1	26
7月	3	4	4	5	5	5	2	28
8月	4	4	3	3	3	3	2	22
9月	3	4	5	5	4	3	2	26
10月	3	4	4	4	5	5	2	27
対象日数計	40	47	48	48	50	48	20	301

表5　年間の利用内容・利用者属性の内訳

	人数	利用内容		性別			年齢			居住地					世帯構成			
		食事	喫茶	男性	女性	不明	65才未満	65才以上	不明	永山	諏訪	その他	不明	独居	夫婦	その他	不明
個人特定利用者 実人数	372			154	218		106	207	59	144	59	74	95	41	62	35	234
個人特定利用者 年間延べ	6930	4289	2641	3441	3489		2125	4659	146	4185	1126	1358	261	2115	2357	703	1755
個人特定利用者 割合		61.9%	38.1%	49.7%	50.3%		30.7%	67.2%	2.1%	60.4%	16.2%	19.6%	3.8%	30.5%	34%	10.1%	25.3%
全体利用者 年間延べ	12084	7225	4859	4484	5427	2173	2233	4903	4948	4309	1157	1358	5260	2116	2357	725	6886
全体利用者 一日平均	40.1	24.0	16.1	14.9	18.0	7.2	7.4	16.3	16.4	14.3	3.8	4.5	17.5	7.0	7.8	2.4	22.9
全体利用者 割合		59.8%	40.2%	37.1%	44.9%	18%	18.5%	40.6%	40.9%	35.7%	9.6%	11.2%	43.5%	17.5%	19.5%	6%	57%

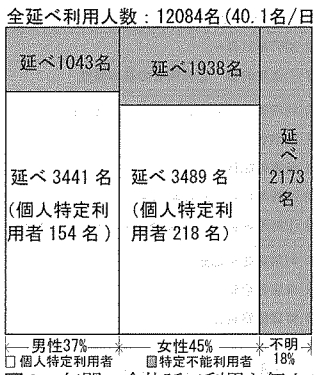

図3　年間の全体延べ利用と個人特定利用者の延べ利用の構成

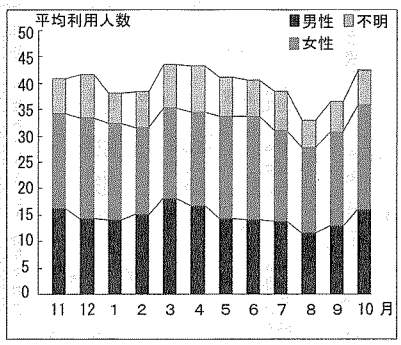

図4　月毎の1日平均利用者数

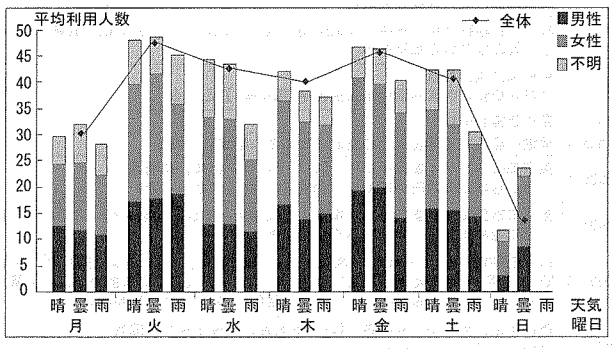

図5　曜日別・天候別の1日平均利用者数

すると月１回以上）来店した利用者は106名となり，この群を安定的な利用を行った群として以下の分析対象とする．尚，来店日数が最も多かった利用者は，分析対象日数301日のうち241日であった．

１）利用者の来店頻度の類型化

ここでは，上述の年12回以上の利用があった個人特定利用者の年間の来店日数を更に，

Ａ：年84日以上利用群（平均的なインターバルで来店したと仮定すると月７日以上：週に２，３日程度もしくはそれ以上来店した群）

Ｂ：年24日以上84日未満群（同上で，月２回以上来店した群）

Ｃ：年24日未満群（同上で，月２回未満の群）

と仮に分類した（表７）．

繰り返しになるが，これらはあくまでも平均したインターバルで来店した場合の想定であるが，例えば調査期間（１年）の前半は頻度高く来店し後半は体調や入院・通院などの関係で利用が落ち込む人，またはその逆のケース，なども考えられる．そこでＡ群とＢ群について利用の定常性を測るため，個々人別に月毎の来店日数とその平均からみた12ヶ月間のばらつきの標準偏差を尺度として，標準偏差３未満と３以上に，Ａ１・Ａ２，Ｂ１・Ｂ２，と分類してみた．人数内訳は表７に示す通りである．

次に，このＡ１・Ａ２，Ｂ１・Ｂ２，Ｃのそれぞれの群に分け，個々人の年間の月別利用回数をグラフ化すると図６に示すようになる．これによると，Ａ１（標準偏差３未満）は毎月平均15回程度で年間を通じて安定した頻度で来店する人達，Ａ２（同３以上）は同様に月平均15回程度の来店が３～４か月定常的に続く期間と利用が落ち込む期間がある人達，と理解できる．同様にＢ群についてみると，Ｂ１（標準偏差３未満）は年間を通じて月平均４，５回の安定した頻度で来店する人達，Ｂ２はこれより頻度高く来店する月もあれば利用が落ち込む月もある人達，などとなっていることがわかる．

こうした利用パターンの多様性があることを理解したうえで，年12回以上の利用があった個人特定利用者106名についての福祉亭への来店頻度を以下のように分類した．これを以下，頻度類型と称する．

［常連群］：Ａ１・Ａ２：19名：月15回前後，週にして３，４回程度もしくはそれ以上の利用がある者．

［定常群］：Ｂ１・Ｂ２：61名：月５回前後，週にして１，２回程度もしくはそれ以上の利用がある者．

［時々群］：Ｃ：26名：月に１，２回程度の利用がある者．

以上のように，ほぼ毎日など極めて頻度高く来店する利用者から月１，２回程度ではあるが定常的な来店がある利用者まで多様であり，更にその背後には年に数度は来店する多くの利用者が存在する，などの状況を知ることができた．

２）利用者の曜日選択傾向の類型化

福祉亭の活動を長期間見守っていると，ほぼ毎日来店などの常連群はともかく，定常群，時々群などの方々の中にはある特定の曜日を選んで来店している方々も少なくないことに気付く．こうした傾向を分析するため，この章での分析対象者106名についての曜日選択傾向を表８に示すように分類してみた．これを以下，曜日類型と称する．

［曜日特定群］：14名：ある一つの曜日を特定して来店する群．その曜日担当のボランティア，料理人に会うために来店する利用者など．女性に多い．

［曜日指定群］：31名：２，３の曜日を選択して来店する群．仕事上の都合や定期的なサークル活動の後に来店する利用者などが考えられる．

［全曜日群］：61名：曜日を特に選択しないでどの曜日も平均的に来店する群．分析対象の57%，男女ほぼ同数である．

このように一部の利用者に一定の曜日選択傾向があるのは，参与観察調査の経験から類推すると，利用者個々人の週間の生活パターン（医院やデイサービスへの通院・通所やその他の一週間の生活リズムなど）が背景にある他，曜日によって交替するボランティアとの人間的な相性，曜日による定食の料理のメニュー・

表７　年間12回以上利用者の来店頻度の分類

頻度類型		分類の方法 年間来店日数	分類の方法 標準偏差	人数 男	人数 女	人数 計	年間平均来店日数
A	1	84日以上	３未満	4	4	8	183.4
	2		３以上	6	5	11	147.9
B	1	24日以上84日未満	３未満	19	25	44	41.6
	2		３以上	13	4	17	50.8
C		24日未満		8	18	26	16.2
			計	50	56	106	

表６　個人特定利用者（372名）の年間来店日数分布

来店日数	男	女	合計
1	47	84	131
2～5	41	55	96
6～11	16	23	39
12～23	8	18	26
24～35	9	11	20
36～47	8	11	19
48～59	7	4	11
60～83	8	3	11
84～119	4	1	5
120～	6	8	14
合計	154	218	372

注：網を掛けた部分は分析対象【106名】

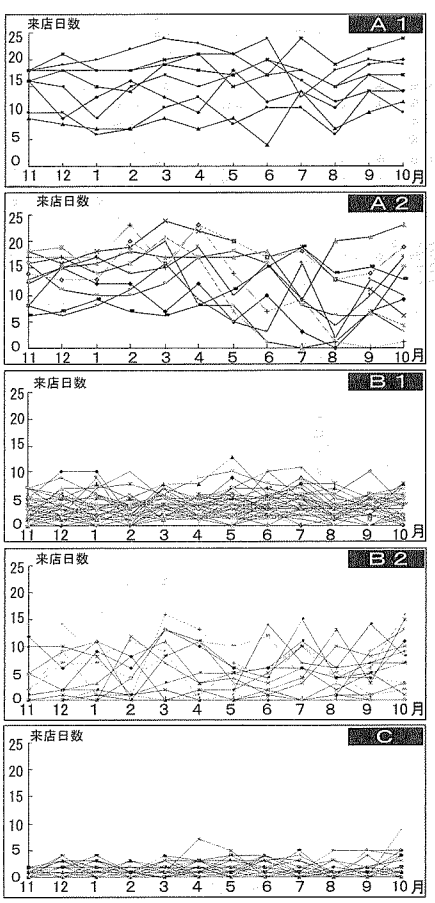

図６　個人特定利用者の月毎の来店日数(頻度類型別)

表８　曜日選択傾向の分類

分類の方法	利用人数 男	利用人数 女	利用人数 計	計	曜日類型
１週間を100%として，１つの曜日のみ利用率が６０%以上	3	11	14	14	曜日特定群
１週間を100%として，２つの曜日をあわせて利用率が７０%以上	11	6	17	31	曜日指定群
１週間を100%として，３つの曜日をあわせて利用率が８０%以上	5	9	14		
１週間を100%として，４つの曜日をあわせて利用率が８５%以上	11	14	25	61	全曜日群
１週間を100%として，５つの曜日をあわせて利用率が９０%以上	13	9	22		
１週間を100%として，全ての曜日をあわせて利用率が９５%以上	7	7	14		
計	50	56	106	106	

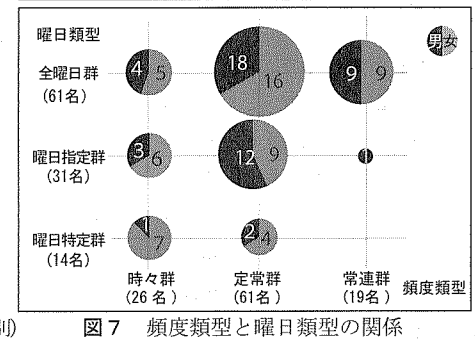

図７　頻度類型と曜日類型の関係

味付け（料理人は曜日によって交替する），曜日による福祉亭の活動プログラム，利用者たちの間の人間関係，などが影響しているものと考えられる．これについては現時点では定量的な根拠を示せないので，次報における常連利用者に対するヒアリング調査によって，補足的な分析を行いたい．

3）頻度類型と曜日類型の関係

以上より，頻度類型と曜日類型のクロス集計をした結果を図７に示す．頻度類型毎に傾向を示すと，

［常連群］：頻度高く来店するので，その殆どが全曜日群である

［定常群］：曜日を特に選ばない全曜日群と曜日特定＋曜日指定がほぼ拮抗する．

［時々群］：全曜日群，曜日指定群，曜日特定群がほぼ拮抗する

などとなっている．こうした利用の曜日の選択にも一定のパターンがあることは興味深い．

６．週間調査による福祉亭の利用様態に関する分析

以上の年間の利用概要の整理を受けて，ここでは一週間の詳細観察調査によって，福祉亭において来店者がどの様な活動・利用を行っているかの解明をおこなう．詳細観察調査を 2010 年 10 月 19（火）から 25（月）までの日曜日（休業）を除く６日間行い，調査者・余が開店から閉店まで店内に滞在し，来店者の利用内容，滞在時間，滞在場所（席）と行為内容を記録した．

６．１．週間の利用概要

調査期間の延べ利用人数は 299 名，一日平均 49.8 名であった．この内，個人特定利用者は 138 名，この延べ利用は 257 回であり，週間の全延べ利用の 86％を個人を特定しながら調査できている．ここでは以下，この個人特定利用者 138 名・延べ 257 回の利用を中心に分析を行うこととし，その各日の利用内容や属性別内訳などを表９に整理した．個人特定利用者は一日平均 42.8 名，平均１人 1.9 回／週の利用である．食事と喫茶（飲酒も含む）は 55：45，男女比率は４：６，65 歳以上高齢者が約７割，福祉亭が立地している永山に居住地をおく利用者が 56％である．

６日間を平均した在店人数の時刻変動（15 分毎）を図８，図９に示す．午前から午後早めの時間帯の利用者は女性が多く，食事利用が中心である．食事利用は 13 時半をピークに減少していく．午後遅めから男性の利用が増加し，喫茶や飲酒をしながらの趣味活動（囲碁・将棋）が中心となる．

６．２．福祉亭の一日の活動と利用のされ方

平日（10 月 19 日（火））と週末（10 月 23 日（土））の終日の活動展開の様子をそれぞれ図 10，図 11 に示す．尚，図中に個々人に付されている番号は利用者個々人を特定する年間調査から得た利用者コード番号である．

10 月 19 日（火）は男性 23 名，女性 29 名の計 52 名が来店した．個人利用や趣味活動により形成されたグループ活動が観察された．食事をとるための利用者はそれぞれ三々五々来店するが，利用者間で頻繁に会話をする場面や，趣味活動グループが自然発生的に形成される様子などが観察された（図 10，②③④⑤⑥）．

10 月 23 日（土）は男性 16 名，女性 22 名の計 37 名が来店した．この日は午前中から一人で音楽を聴いたり，外へたばこを吸いに行く利用者（図 11，①②）や，午後には利用者の昼寝の様子（図 11，③）

表９　週間調査期間の各日の利用状況

年月	日	曜日	天気	利用人数	利用内容		性別		年齢			居住地				世帯構成			
					食事	喫茶	男	女	65歳未満	65歳以上	不明	永山	諏訪	その他	不明	独居	夫婦	その他	不明
2010年10月	19	火	晴	52	29	23	23	29	19	33	0	27	8	11	6	8	14	7	23
	20	水	曇	39	25	14	13	26	6	32	1	26	8	4	1	13	7	1	18
	21	木	雨	31	16	15	16	15	10	21	0	18	8	2	3	8	10	1	12
	22	金	曇	51	27	24	18	33	19	31	1	30	8	6	7	12	12	4	23
	23	土	晴	37	16	21	15	22	14	22	1	21	9	4	3	9	9	4	15
	25	月	曇	47	28	19	20	27	14	33	0	21	10	10	6	9	10	5	23
合計				257	141	116	105	152	82	172	3	143	51	37	26	59	62	22	114
平均				42.8	23.5	19.3	17.5	25.3	13.7	28.7	0.5	23.8	8.5	6.2	4.3	9.8	10.3	3.7	19.0
割合					54.9%	45.1%	40.9%	59.1%	31.9%	66.9%	1.2%	55.6%	19.8%	14.4%	10.1%	23.0%	24.1%	8.6%	44.4%

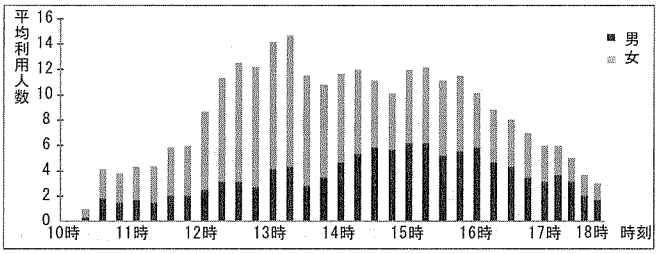

図８　週間調査における男女別利用人数の時刻変動（６日間平均・15分毎）

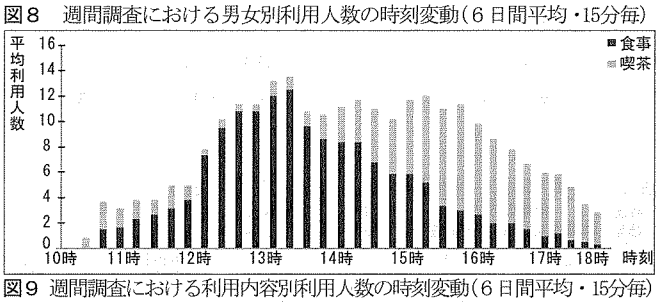

図９　週間調査における利用内容別利用人数の時刻変動（６日間平均・15分毎）

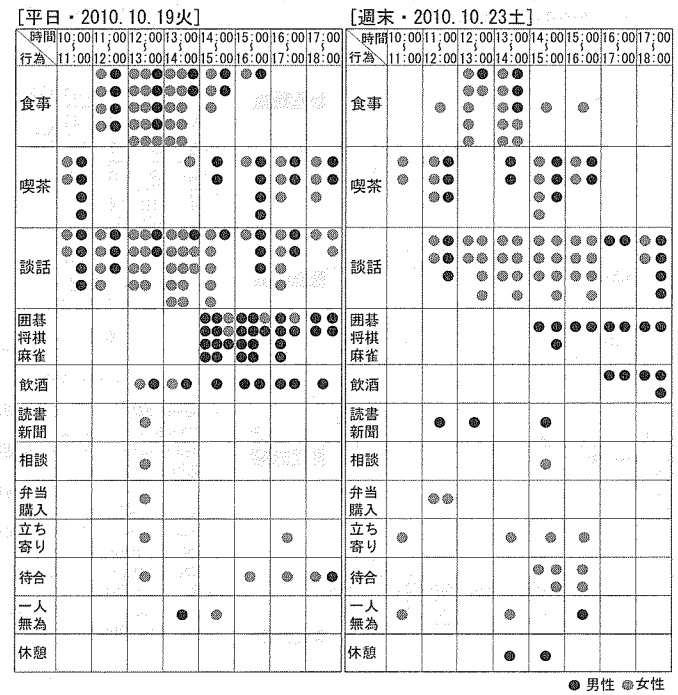

図１２　利用者の行為内容の時刻変動

やスタッフへの相談の場面（図 11，④）などが観察された．利用者は福祉亭を自宅以外の第二の居間のように使っていると考えられる．

以上を概観すると，福祉亭での利用者の滞在の仕方は，1）食事・喫茶の利用，2）運営者・ボランティア，利用者相互の会話・交流・相談，3）囲碁・将棋などの相手の居る趣味活動，4）一人での休息・佇み，5）新聞・読書，6）飲酒を媒介とした交流・談話，など多様

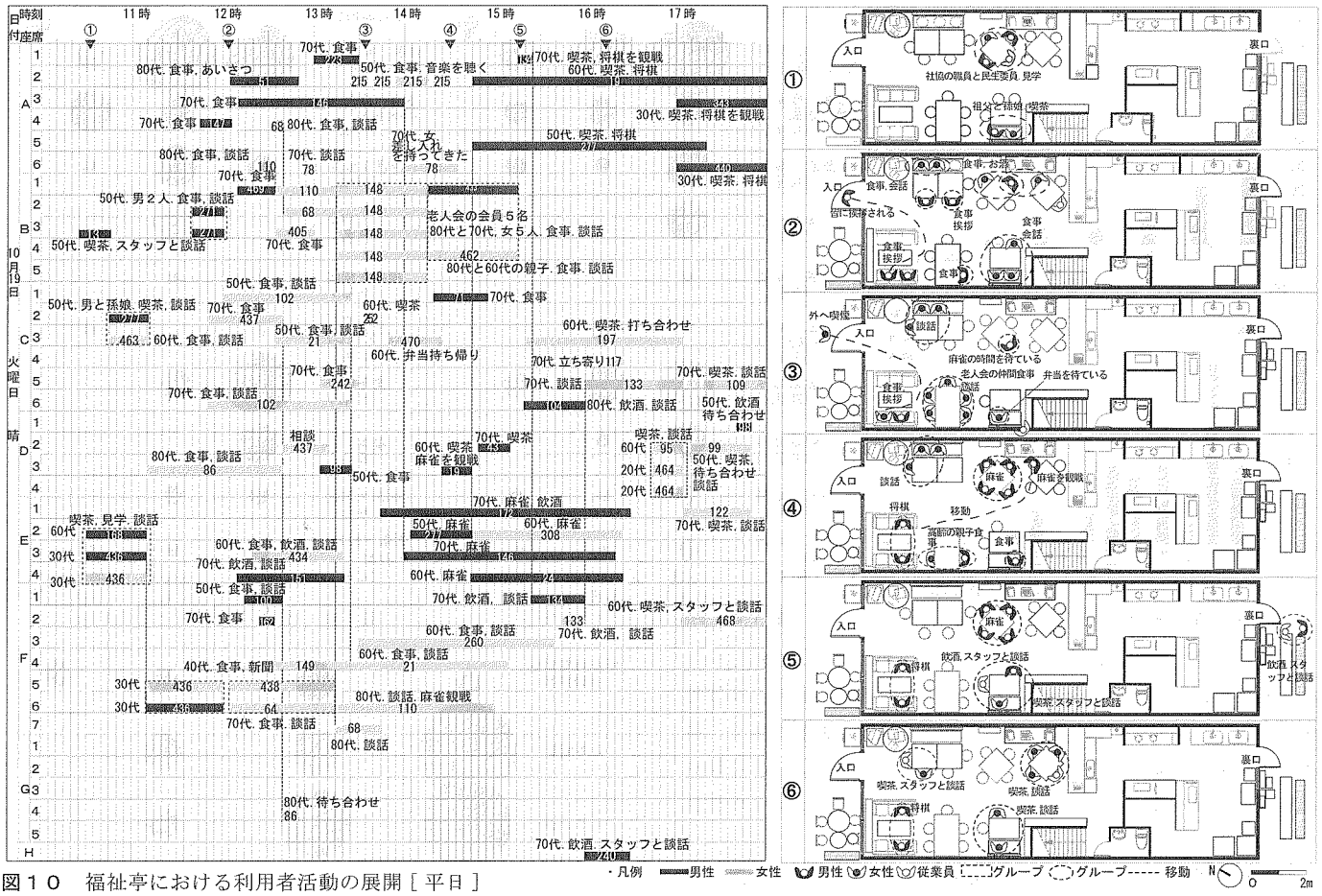

図１０　福祉亭における利用者活動の展開［平日］

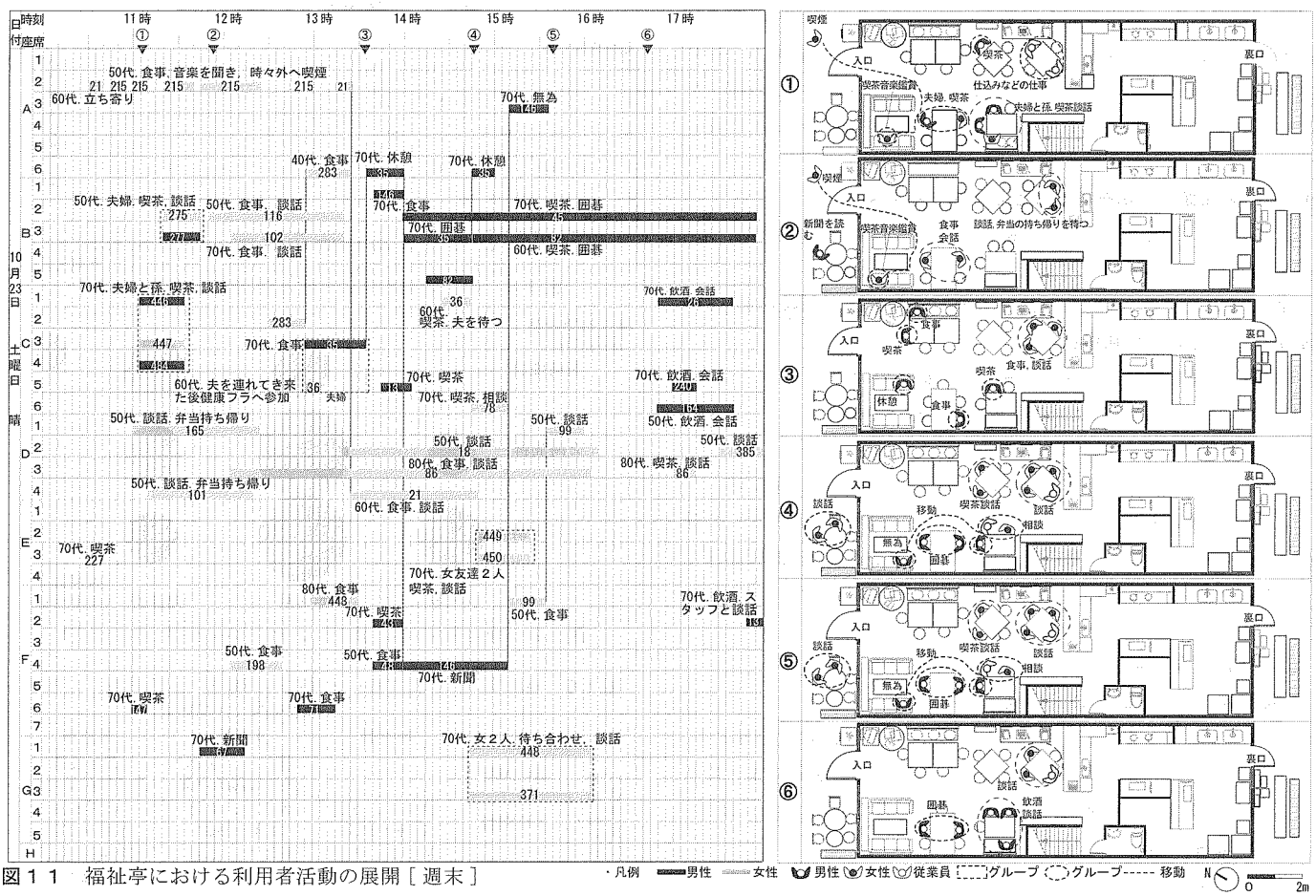

図１１　福祉亭における利用者活動の展開［週末］

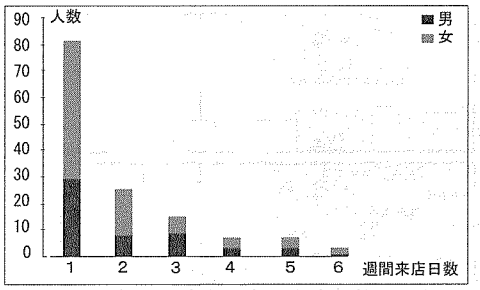

図１３　個人特定利用者の来店日数の分布

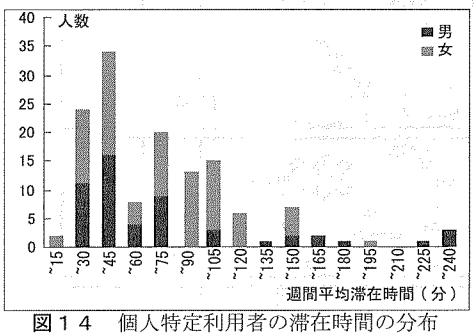

図１４　個人特定利用者の滞在時間の分布

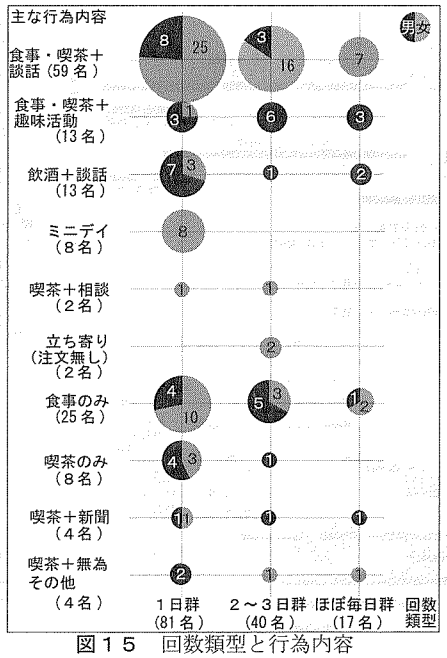

図１５　回数類型と行為内容

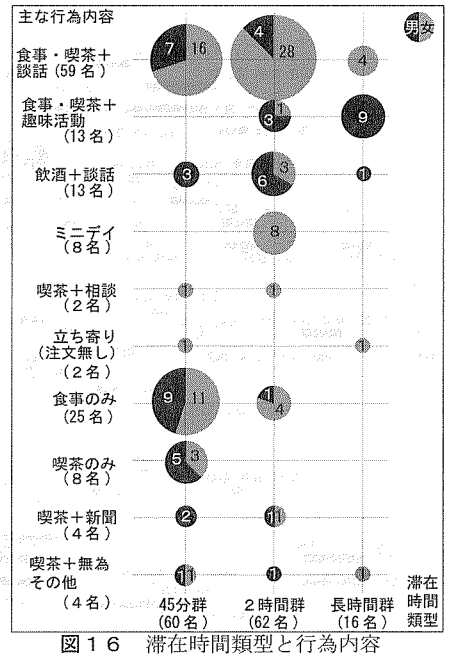

図１６　滞在時間類型と行為内容

な様態がありこれらが常時共存していることがわかる．これらから利用者の滞在の仕方と行為を図 12 に示す 12 種類に分類し，時間帯毎に発生した行為を記録した．女性利用者は食事と談話が多く，他者との交流を頻繁に行なう．男性は２，３名のグループによる趣味活動が主となっているが，読書や一人での飲酒など，他者との交流のない場面もみられた．

常連利用者の中には，特定の利用者が現れると自然に席を譲る様子が観察された．利用者間で暗黙のルールがあると考えられる．利用者が店に協力する場面もよく見られた．昼食を食べ終えると自ら食器を流し場へ持っていったり，閉店時間になると店外の椅子やテーブルを店内にしまう手伝いをしたりなど，利用者が様々に互いに思いやりながら共生する姿といえる．

６．３．来店頻度と滞在時間の類型に関する考察

ここでは，週間調査における個々人の来店回数や滞在時間について考察する．

個人特定利用者（138 名）個々人の一週間の来店回数を図 13 に示す．この分布から利用者を，

［１日群］：調査の週に一回だけ来店した群：81 名

［２，３日群］：同，２または３回来店した群：40 名

［ほぼ毎日群］：同，４回以上来店した群：17 名

の三つに分類することとする．これを以下，回数類型と称する．

同様に，個人特定利用者個々人の福祉亭での滞在時間[注8)]の分布を図 14 に示す．15 分未満の滞在から４時間を超える長時間滞在まで幅広く分布している．この分布から利用者を

［45 分群］：滞在時間が 45 分未満の利用者：60 名

［２時間群］：同，45 分以上 120 分未満の利用者：62 名

［長時間群］：同，120 分以上の利用者：16 名

の三つに分類することとする．これを以下，滞在時間類型と称する．

回数類型と利用者の店内における主な行為内容の関係をまとめると図15に示すようになる．三つすべての類型で［食事・喫茶＋談話］の利用者が最も多い．

滞在時間類型と利用者の店内における主な行為内容の関係をまと

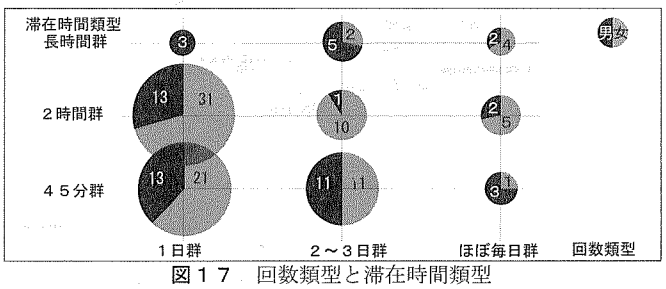

図１７　回数類型と滞在時間類型

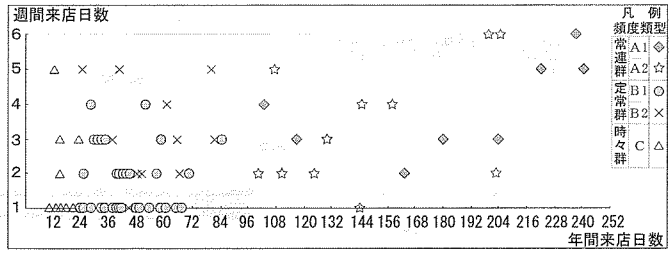

図１８　年間調査の来店日数と週間調査の来店日数

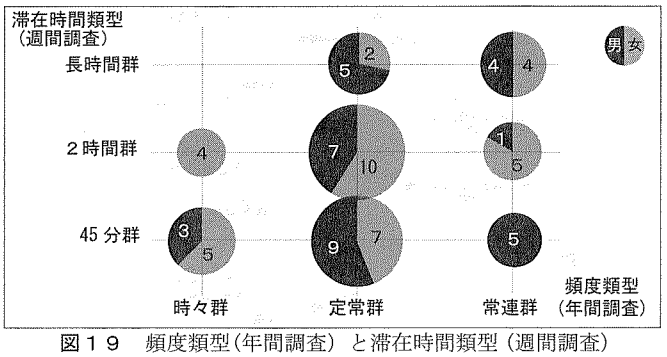

図１９　頻度類型（年間調査）と滞在時間類型（週間調査）

表１０　頻度類型（年間調査）と滞在時間類型（週間調査）の解釈

		頻度類型（年間調査）		
		時々群	定常群	常連群
滞在時間類型（週間調査）	長時間群	——	週に１，２回 長時間趣味活動	ほぼ毎日 長時間趣味活動
	２時間群	月に１，２回 食事＋談話	週に１，２回 食事＋談話	ほぼ毎日 食事＋談話
	４５分群	月に１，２回 食事	週に１，２回 食事	ほぼ毎日食事 （女性に限られる）

めると図16に示すようになる．［45分群］はほぼ食事または喫茶のみ，またはこれに加えて若干の談話の後帰る利用者である．昼食目的の利用者は滞在時間が短く，他者との交流も挨拶程度という方が多い．［２時間群］は食事・喫茶と談話・交流を楽しむ群であり，女性利用者が多い．［長時間群］は食事・喫茶（飲酒）とともに囲碁・将棋などの趣味活動をする男性利用者が多い．午後の半日を福祉亭で過ごす利用者も少なくない．趣味活動や談話などを行なう利用者は比較的滞在時間が長く，中には一日に何度も福祉亭に訪れる方も見られた．

以上の考察を受け，回数類型と滞在時間類型の関係をまとめると図17に示すようになる．［１日群］×［２時間群］，すなわち週に１回福祉亭に来て食事・喫茶に加えて談話を愉しむ群が44名と最も多いが，その他の組み合わせも数は少なくとも該当はそれぞれにある．例えば，［ほぼ毎日群］×［長時間群］は数は少ないものの福祉亭を毎日の居場所として活用している人々であり，［ほぼ毎日群］×［45分群］はほぼ毎日福祉亭に昼食を摂りに来る人々である，などと解釈できる．福祉亭が，広範な人々に，それぞれの個性やライフスタイルにあわせた滞在の仕方を受け入れることができる場であることを示唆している．

７．年間調査と週間調査の照合による利用様態の考察

週間調査における個人特定利用者138名の内，71名が利用者コード番号によって年間調査との照合が可能となった．従って，この71名については，年間調査の類型と週間調査の類型の関係を求めることができる．

先ず，年間の来店日数（年間調査）と週間調査の期間の来店日数の関係を求めると，図18に示すようになる．当然ながら緩やかな正の相関があるが，年間200日以上の来店者でも当該週の来店は２，３日である者，逆に年間30～40日の来店でも当該週はほぼ毎日の来店である者，など多様な分布をみせる．

次に，年間調査の頻度類型と週間調査の滞在時間類型のクロス集計の結果を図19に示す．このそれぞれの組み合わせについての解釈は表10に示すとおりであるが，［月に１，２度のペースで福祉亭に昼食を摂りに来る人達］から，［ほぼ毎日福祉亭で長時間趣味活動を中心に滞在する人達］まで，その有り様は多様であることが示される．ここでも再び，福祉亭が広範な人々にそれぞれの個性やライフスタイルにあわせた滞在の仕方を受け入れることができる場であること，を示唆している．

８．考察とまとめ

多摩ＮＴ諏訪・永山地区における高齢者支援スペース「福祉亭」の利用実態を詳細に把握するため，参与観察調査，年間利用実態調査，週間利用実態調査を行い，その活動や利用の様態を把握することができた．これらから考察される福祉亭の地域社会における存在の意義と併せて簡単なまとめを以下に記す．

冒頭に述べた本報の研究目的のうち，福祉亭の活動内容，活動場面などについては，次の様な知見を得た．

1)　福祉亭は毎日提供している食事・喫茶のほか，新聞の発行，スタッフや民生委員への相談タイムなど，日々地域住民の生活支援活動を行っており，またここを日常的な居場所とする人達の趣味活動の場としても活用されている．

2)　福祉亭の１年間の全延べ利用者の約６割はスタッフと顔馴染みの関係である（本研究で言う個人特定利用者）．従って，スタッフにとって個々人の利用状況の変化は安否確認の一つの目安にもなり，地域の見守りの場としての機能を持っているといえる．

また，研究目的のうち利用者の利用様態，来店頻度や滞在時間の類型などについては，次の様な知見を得た．

3)　日々交代する料理人やボランティアスタッフの個性，多彩なプログラムの提供などが福祉亭の魅力といえる．こうした多種多様な顔を持っていることが，利用者の来店を促す要因と考えられ，常連を中心とした高齢者の利用頻度を高めることに寄与していると考えられる．特に週に１～２回以上の利用がある［定常群］や［常連群］などの人々にとっては，福祉亭は日常的な身の寄せ場所となっていると解釈され，こうした人々に対し，福祉亭は地域社会からの孤立を防ぐ居場所としての機能を有していると捉えることができる．尚，この点については常連利用者に対するヒアリング調査について報じる次報において根拠を補足したい．

4)　年間を通じて毎日の日課のように通う利用者や，日中の居場所として半日を過ごす利用者などの常連利用者にとって福祉亭は日常生活で重要な居場所として機能している．一方，それほどの頻度でなくともここに週１，２回または月に１，２回など定期的に通う利用者も存在し，福祉亭が広範な人々にそれぞれの個性やライフスタイルにあわせた滞在の仕方を受け入れることができる場であることが理解できる．

以上，多摩ＮＴ諏訪・永山地区に位置する福祉亭の活動，利用実態，利用者類型などについて考察してきた．次報では常連利用者に対して行ったヒアリング調査によって，こうした人々の日常的な地域生活にとって福祉亭がどの様な意味を持っているかについて考察するとともに，本報において考察が行き届かなかった部分を補足したい．

尚，今後の持続的な活動の維持にとってボランティアの確保や育成も大きな課題となっている．引き続き，継続的な調査によって福祉亭の活動を見守っていきたいと考える次第である．

謝辞

筆者等をいつも温かく迎えていただき，福祉亭の活動に参加しながらの研究活動に支援を頂いている，スタッフの皆様，利用者の皆様に，深甚なる敬意と感謝の意を表します．

注

注1)　厚生労働省ホームページ公表，介護保険事業状況報告，http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/m10/1005.html（参照2010-5-20）．

注2) 福祉亭はテレビや新聞雑誌などで頻繁に紹介されている：NHK（2006年４月放送）「笑顔があふれる食堂」，「扉を開けてください～絵手紙を届ける」，読売新聞（2009年５月24日），週間ダイヤモンド誌（2009年５月号）など．また，参議院の第171回国会「少子高齢化・共生社会に関する調査会」第３号（2009年２月25日）の参考人として理事が出席している．

注3)「若人塾」：地域の障害者の作業所．

注4)「生活サポート隊」は2003年に開始された福祉亭の一事業（主に水曜日の運営を担当）であり，独自の活動も行なっている．主な活動は在宅支援活動，子育て支援，家事支援などである．その具体的な内容を以下に述べる．①利用条件：年会費1000円と保険料300円の会員登録が必要であ

る．利用料は月曜日から土曜日の８時～17時は１時間900円，17時～22時は1100円となっている．日曜日と祝日の利用料は８時～17時は１時間1100円，17時～22時は1300円となっている．利用には予約が必要である．②サービス内容：子育てや高齢者・障害者へのサポート．幼児のいる家庭では幼児の保育としての利用が多く，高齢者は送迎や家の掃除などでの利用が多い．

注5）東京都が多摩市を通して福祉亭に委託している介護予防が目的のミニデイサービス事業．毎週水曜日，健康体操，頭の体操，唱歌，ペン習字などの介護予防イベントや季節ごとに誕生会や，クリスマス会，新年会などを実施している．年間60万円の補助金が支給されている．運営主体は「生活サポート隊」である．

注6）手作りのリボンを付け，それを目印に気軽に声を掛け合い助け合おう，という活動．７つの地域団体（福祉亭，永山公民館ベルブぜみ運営委員会，NPO法人麻の葉，NPO法人あいファーム，NPO法人多摩生活サポートセンター，在宅介護支援センターケアサポートたま，貝取在宅介護センター）が賛意ししている．

注7）健康フラダンス：活動場所をいきがいデイサービスセンターに移すこととなったが，現在でも福祉亭提供プログラムとして行われている．

注8）週間調査期間中，複数日来店の利用者については各日の滞在時間の平均を用いて分析を行っている．

参考文献

1）國上佳代，余錦芳，松本真澄，上野淳：多摩ニュータウン諏訪永山地区における高齢者の居場所の形成と利用・認知の実態に関する研究：日本建築学会計画系論文集No.663，pp973-981,2011.5

2）田中裕基，登張絵夢，竹宮健司，上野淳:自立高齢者の地域生活支援施設のあり方に関する研究－多摩市コミュニティセンター内の高齢者スペースにおけるケーススタディー，日本建築学会計画系論文集No.562，pp165-172，2002.12

3）鄭ソイ，上野淳：自立高齢者を支える地域環境整備の条件に関する研究－多摩市「いきがいデイサービス」の利用実態と利用者の特性－日本建築学会計画系論文集No.608，pp35-42，2006.10

4）山本多喜司：高齢者の居場所，建築雑誌vol18，p46-47，2003.10

5）桧垣牧子，福田由美子：「ふれあい・いきいきサロン」事業の考察－高齢齢者の生活拠点施設に関する研究－，日本建築学会大会学術講演梗概集E-1，pp315-316，2005.9

6）上田竜也，藤田忍，薬師寺宏実：大阪府住宅における「ふれあいリビング」に関する研究，日本建築学会近畿支部研究報告集，pp81-84，2002

7）張海燕，柏原士郎，吉村英祐，横田隆司，飯田匡：新千里東町の「ひがしまち街角広場」の利用実態と利用者意識について－高齢社会に対応したコミュニティ施設の整備手法に関する研究－日本建築学会計画系論文集，No.589，pp25-32，2005.3

8）田中康裕，鈴木毅，松原茂樹，奥俊信，木多道宏：「下新庄さくら園」における目的の形成の関する考察－－コミュニディ・カフェにおける社会的接触－，日本建築学会計画系論文集，No.613号，pp135-142，2007.3

9）田中康裕，鈴木毅，松原茂樹，奥俊信，木多道宏:コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察－主（あるじ）の発言の分析を通して－，日本建築学会計画系論文集，No.614，pp113-120，2007.4

10）田中康裕，鈴木毅，松原茂樹，奥俊信，木多道宏:日々の実践としての場所のしつらえに関する考察－「ひがしまち街角広場」を対象として－，日本建築学会計画系論文集，No.620，pp103-110，2007.10

11）松原茂樹，岩根敬子，鈴木毅，田中康裕，奥俊信，木多道宏：大阪府ふれあいリビング事業の運営と連携－住民が運営する交流の場所と地域環境　の関係に関する研究－，日本建築学会計画系論文集，No.636，pp347-354，2009.2

12）小松尚，辻真菜美，洪有美：地域住民の居場所となる交流の場の空間・運営・支援体制の状況－地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究その１－日本建築学会計画系論文集，No.611，pp67-74，2007.1

13）小松尚，辻真菜美，洪有美:設立者からみた交流の場の開設場所と運営及び地域的つながりの相互関係－地域住民が主体的に設立・運営する交流の場に関する研究，その2－日本建築学会計画系論文集，No.620,pp95-102，2007.10

14）中村久美：地域コミュニティとしての「ふれあい・いきいきサロン」の評価，日本家政学会誌，Vol.60，pp25-37，2009

（2011年５月10日原稿受理，2011年９月26日採用決定）